セルツェ（心）-遥かなるエトロフを抱いて-

根室空襲体験、終戦、日ロ混住生活　～択捉島出身の山本昭平さん～

【根室空襲】

昭和二十年七月十四日朝六時、突然空襲警報が出て、頭上を飛行機が飛び去りました。港の方から生木を割くようなバリッバリッという聞いたこともない不気味な音が聞こえてきました。空襲だ！宿のおばちゃんに「防空壕は？」と尋ねたところ、道路の前にあるという。しかし入ろうとしたところで壕の中は水がものすごく溜まっていて入れない。仕方なく引き返して二階へ上がり、布団をかぶって息を殺していました。上空を何度か飛行機が通過する。ドーン・・・壁を大きなハンマーで叩かれた音、家が揺さぶられる。生きた心地がしませんでした。早く行ってくれと祈るのみでした。十五分ほどで敵機が去り、みんなの無事を確かめ合い、先ほど音のした壁を見て驚きました。十五・六センチの穴が空いており、その延長線の最終地点の押入れの毛布の中に熱気も生々しい機関砲の薬莢が潰れて入っていました。米軍機の火力の凄まじさにひどく驚きました。

【浦河丸撃沈】

翌十五日早朝、花咲の方から突然プロペラ音と共に飛行機が六機現れ、町の上空をかすめ貨物船を一機ずつ攻撃し、それを終えると浦河丸に銃撃してきました。急いで船室に逃げ込み、父と妹に声をかけると大丈夫の声、生木を割くバリッバリッという音が天空にこだまし、船体に命中した弾丸は何百もの鐘をたたくように耳をつんざき、ロケット弾を発射するシュッという音とともにドカーンと船を揺すりました。敵機の波状攻撃を受け、船に乗っていた多くの人が命を落としました。この悲惨な状態を目にした途端、体の底から全身を血が遡るような怒りがこみ上げてきました。

【ふるさとへ帰る】

八月二日夕刻、根室・紗那間の定期船金栄丸が出帆しました。家には四日に着きました。戻ってまず、母と祖母、みんなを前に一部始終を報告しました。

ふるさとへ帰ってから本土に引き揚げるまでの二年の間、私の目に入ってくるものは全てグレーでした。色がなかったことをその時は意識せずに暮らしていました。今、墓参や自由訪問で現地を訪れて初めてここはこんな色だったんだ、などと思い出しています。きっと鬱だったんでしょうね。

妹と

瑞泉寺を背に
父、妹たちと

【愛称　ドクトル】

村長から軍医を泊めて欲しいと受け入れたのが、イワン・イワノビチ・ゴロフコ少尉でした。名前が難しくて言えないので我が家では「ドクトル」と呼ぶことにしました。ドクトルは人が良く高潔で上等な人物でした。生きていればもう一度会いたいけれど、飲めない酒を無理して飲むような人だし、医者の不養生できっともう死んでしまっているでしょうね。わずか二年間でしたが敗戦下の山本家にとってドクトルとの出会いは偶然とは考えられないと思っています。運命の糸を持っている何者かが細工をしたのではないか。そんな気がしてなりません。ドクトルの好意に心から礼を言いたい。あの緊張した日々、一家はどれほど癒やされたか計りしれません。島では日ソで銃弾の撃ち合いはしなかったが、日本はソ連に負けた。その国民である島民を、山本家を大切にしてくれた。亡き母もろとも深く敬意を表します。

「セルツェ（心）—遥かなるエトロフを抱いて—」は、ロシア語通訳の不破理江さんが、択捉島蘂取村出身の山本昭平さんの体験談を、足かけ十一年、何度も聞き取りを重ねた労作。父を亡くした根室空襲、ソ連軍の島への進駐、同居したロシア人軍医との友情を中心に、終戦を挟んだ数年間の激動の体験談が短編小説のような切なく、美しい語り口で綴られている。

「セルツェ」はロシア語で「心」という意味。同居したロシア人軍医ドクトルが好んで歌っていたロシアのタンゴの曲名。不破さんが山本さんと出会った際、「セルツェ（心）」とロシア語で書かれた手書きの楽譜を大切に持参していたことも題名にした一因とのこと。（平成二十八年十一月自費出版）

※書籍説明は北海道新聞記事を参照